

工 淨

九 月 号



法然上人鑽仰会

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可 (毎月一日発行)
昭和二十四年四月二十八日 通稱省 (特別送達郵便物) 第三三三二号
昭和四十二年八月二十五日 印刷 (昭和四十二年九月一日發行)

第三十三卷 第九号

劇はこれ
吾等の命

前進社
中村靖之助

前進社

中村靖之助

私達の生活はすべてこれ芝居と
いうことの外、何もありません。
生活のすべてを芝居に帰一
して始めて本当の芝居ができる
とかねがね考えているのを、筆
にいたしました。



唐獅子・牡丹の図

伊東深水筆

隆崇院本堂格天井絵



— 目 次 —

表紙「彼岸花」松濤達文画

深 水 寺

..... 竹中信常…(2)

曼珠沙華

..... 中村昌治…(5)

文化のあけぼの

..... 中村康隆…(6)

名士訪問 前進社 中村靖之助…(10)

ひが事にて候

..... 大南竜昇(14)

御歌をいただく(17)

四苦八苦① 毒矢のたとえ

..... 渋谷賢応…(18)

お茶をおいしく⑨ 煎茶の中の普茶料理

..... 三浦純亨…(20)

浄土宗のおしえ⑧ 浮土三部経について

..... 丸山博正…(22)

木魚の音

..... 木村無外…(26)

連続
結語 みんなの法然さま・法難はつづく

..... 高橋良和…(29)

ある質問…伝宗伝戒の方法(32)

あ
み
だ
仏
と
心
は
西
に
う
つ
せ
み
の

も
ぬ
け
は
て
た
る
こ
ゑ
ぞ
す
ず
し
き

法
然
上
人
御
歌



深^{しん}

水^{すい}

寺^{でら}

竹 中 信 常



老師父在世のころの話である。

老僧がお盆の棚経に歩いてきたときのことである。あいにく扇子^{せんす}を忘れて家を出てしまったので、途中、一家の檀家で扇子を所望した。それをもって、当時池上の本門寺裏の閑寂の地に居をかまえておられた、伊東深水画伯のお宅へうかがった。読経回向がすんで、画室に招ぜられて冷茶を馳走になっていた老僧は、いま貰ってきた白扇をつかいながら、フト思いついて、

「先生、これに一筆描いてくださらんか」と、画伯にたのんだものである。

「ああ、いいですよ」

深水画伯はいとも気軽に答えられると、老僧の差し出した白扇をかたわらの机の上にヒョイと置くと、つづけていた世間話に戻ったのである。ことわられるかと思ったのに、いとも簡単に引きうけられたので、いささか拍子ぬけしたが、それでも早速に描いて貰えるかと思いつながら、話のあいづちを打っていたが、一向に絵筆をとるような気配すらない。まだ棚経にまわらねばならぬので、

「先生、いま描いてくださらんか」

というと、画伯はつと立って、画室のすみに置かれてある六尺ほどの長持^{ながもち}の蓋をあけて、

「ちょっと、これを見てください」

とふりむかれた。老僧はなんだろうと長持のなかをみると、何千本という扇子が一杯入っている。しかも、それが全部、白扇なのである。依頼されて描かずにあるものを「画債」と

いうのだそうだが、その画債が一杯つまっていたのであるわけである。

◇ ◇ 二 ◇ ◇

伊東家は代々拙寺隆崇院の檀家であり、御両親や親戚の靈は、当院の寺内に眠っている。したがって、御両親の年回などよくつとめられたが、ある年の父君の年回到、一間半と一間の大衝立に、菊の花を描いて上供された。前日の夜半まで描いていたといわれ、葉の墨色などまだ濡れているほどであった。その翌年にはその裏に梅の枯木を描いてくださった。

この衝立は、残念ながら戦災のため堂宇と運命をともにしてしまった。

深水画伯といえば「美人画」といわれるほどで、その描かれる婦人像は日本美の典型とされた。大正十一年「指」と題する夕涼みの婦人像を平和博覧会に出品された。この画は大評判になり、日本画壇における深水画伯の位置を決定的なものにしたのである。そのモデルは画伯の令閨、伊東好子夫人であり、爾来、続々と発表された画業のほとんどが夫人をモデルにされたものであることは、当時を知る人の熟知するところである。夫人の句に

「夫描きし素足いまも白きがかなし」というのがある。

夫人はよくお弟子さんをおともにして来詣された。戦後、北鎌倉に移られてからも、折りにふれて来詣され、老僧と世間話を興ぜられた。

夫人は諸芸をよくされたが、とくに俳句を好まれ、また仕舞、小鼓に堪能であったときく。「宗旦むくげ」と題する隨筆集も、川端康成氏の序文を添えて公刊されている。二人の子息を育て上げられてからは、その芸道は一そう深まったようであった。

その夫人が逝去されたのは、深水画伯が何度目かの外遊で、南米にマヤの古代文化を探ぐられていた昭和三十七年の八月初旬であった。画伯が急拠、旅程を変更して帰来されたのはむろんであるが、暑いさなか、通夜、葬儀、納骨、中陰と、大ぜいのお弟子方もよくつとめられたものである。夫人が生前、どのようにかこの人々によくされていたかがアリアリとわかった。

◇ ◇ 三 ◇ ◇

当時、ちょうど拙寺では戦災で焼失した本堂の再建半ばで、鉄筋二層屋根の堂宇ができたばかりであった。夫人の陰に来詣された画伯は、コンクリートの打ちばなしの、倉庫のようにガランとした本堂で、天井を見上げながらいわれた

「天井画を描きますよ。家内の追善のために、どこにも見られないような天井画を……」

わたしはこの言葉をききながら、冒頭に述べた老僧と白扇のことを思い出した。そして、いまは亡き老僧も、画伯のこの言葉をきいて、きっと喜んでいることだろうと思った。

その天井画が完成したのである。本誌の口絵に飾った豪壮なる唐獅子と華麗なる牡丹の図は二間四方、つまり八畳の間の広さである。これを中心にして伊東画塾の高足四十余人が故好子夫人・深香院薫營好顔大姉追善のために、それぞれ特意とする四季の花々を描いたのである。

京都、奈良をはじめとして、古い社寺に天井画のたぐいは無数にある。しかし、四十余人が筆をそろえて、一つの目的のために描いたという例は、まさに深水面伯のいわれるように「どこにも見られない」ものである。一つの目的とは、生前慈愛をうけた故人の冥福を祈ることであり、しかもそのことがそのまま、師深水面伯への報恩につらなることである。

ひとくちに四十余人といっても、その絵筆にはそれぞれの個性がある。またそれぞれに仕事もち、時間に追われる人々ばかりである。その人々になんとかまとまりをつけ、連絡もし、配置も相談し、期日をきめるといことは大変なことである。こうした陰の努力を尽くされたのが子息の伊東万耀

画伯であり、高弟白鳥映雪画伯であったのである。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

由来、寺院の仏殿は極楽の莊嚴を此土に映じたものといわれる。その結構は端麗、豪華であらねばならない。参詣の諸人をして、極楽に遊ぶの思いに浸らしめるものでなければならぬ。

幸いにして、今回、伊東深水面伯の発願によって、当寺に極楽の相を現じ得たことは、ひとり一寺の慶びとするにとどまらず、この天井画を仰ぎみる無数の人々の胸に、深水面伯の夫人を偲ぶ仏心と、これに協力した一門の人々の仏恩にむくゆる心とが、測々として浸みわたることであろう。

わたしは、このことについてむずかしい理窟をつけようとは思わない。ただすなおに、画伯ならびに深水面塾の方々の菩提心をありがたく納受するのみである。

この天井画を永久に格護し、爾後、当隆崇院を「深水面寺」

と別称し、伊東深水面伯の偉業のながく日本の仏教の歴史の上に刻みつけられることを念願してやまない。

(昭和四十二年八月十二日稿)

曼珠沙華

ヒガンバナ

中村昌治

先年某新聞に中津溪谷の特有な植物群落として垣川滝周辺のイワタバコを取材して随想を書いた。反響は意外であれやこれやの照会・注意・異論まで得た。その後、現地に一二回訪れた。それからあらぬか立札などされて

乱採のひかえとされているのに感激した。ところが最近行ってみたらイワタバコは全くなり岩壁の特異性が消滅してしまったことに涙した。このイワタバコの群落こそ地域の文化財として保護に何等かの手をうつてもらうべきだと思ったがあとのまつりとなつてしまった。

さてここに掲げたマンジュシャケはイワタバコに比較すると全然とるにたらぬ植物であるが秋の彼岸になると随所に真紅絢爛な花をかざる。しかしこの花を美麗だと見る人はない。これは古来この植物は忌草として嫌悪されていたからである。しかし戦後はこの觀念

はうすれ歌謡曲の歌詞にされて「赤い花なら曼珠沙華 和蘭屋敷に雨が降る……」など某歌手に絶唱されて大向うを沸騰させた。

植物学上から云うと *Lycoris radiata* でヒガンバナ科に属す、マンジュシャケは本来は梵語で *Manjusaka* 「天上の華」という意味、ところがわが国では、ヒガンバナ、テンガイバナ、シタマ加里、シレイエ、シビトバナなど十指にあまる。植物図鑑には「山麓堤塘等に多く自生する多年生草本で、地下に水仙に似た鱗茎を有し外皮黒色を呈す秋日未だ葉の出ない前に三〇㎝ばかりの花軸を抽き其頂端に紅色の花を開く。花蓋は六片で外反し、雄蕊は長く突出している花去つて後冬の初め頃から線状の葉を簇生し、春日この葉は枯死する。故に葉と花とは互にその時期を異にするから、一名ハミズハナミズという。有毒植物の一つである。」と記される。

民俗学的に検討してみると、わが国は昔五六十一年ごとに必ず飢饉に遭遇した。近い例が江戸時代の享保一七年（一七三二）天明四年（一七八四）天保八年（一八三七）を三大飢饉といっている。これがため飢饉に備える作物を救荒作物といって日頃、考究されていた、マンジュシャケは、その尤なるものであった。土佐（高知県）や阿波（徳島県）で藩令をもって指定していた。飢饉が来襲して食物がなくなると野山からマンジュシャケの球根を掘り取って来てまづ水洗して次にゆでてあくを出しさらに川でさらして毒物を取り餅にして食べた。ところが食物に追われると総べての工程をそまつにする。そうすると食ったあととまじりマンジュシャケの花のような真赤な血をはいて死んで行ったという、それこそ日本残酷物語である。

わたしの住む地域にはこういう伝承は消えているが、この花の花期になると、昔の租外地だった堤・畦畔・墓域などにこの花が見られるのはこの痕跡を示すものと信ぜられる。

曼珠沙華あらしが残す瀬の濁り

秋桜子



中 村 康 隆

桂ユキ子さんという女流画家が中央アフリカの人喰い人種の間で前衛画に似た芸術を見出して驚嘆したり、アメリカのかがやかしい文化の蔭にみるヌーディストやさまざまな前衛的芸術の流行に原始へのあこがれを見出したりする面白い旅行記を書かれている。たしか「女ひとり原始部落をゆく」といったような題名の本だったと思うが、いま手許にないのでたしかなことは忘れたが、その中で彼女は中央アフリカの蛮族の村にある仏人の病院で働いていた時の興味ある話を幾つか記している。そこでは狩りなどで怪我をした者が手足を切断されたりすると必ずそれを持ち帰るので、不思議に思っその理由を尋ねてみると、蛮人たちがそれを持ち帰って喰べてしまうらしいのである。狩りにいって殺した動物などもその場で切りさいてはらわたなどむしゃぶりついて喰べてしまうという人たちが、まさかにも自分の手足までたべるといふ話には驚くばかりである。その村の若者で花嫁が隣村の者とあやしいと疑って妻をせめさいなんだが、その内妻が見えなくなってしまうたので調べられたら、若妻を殺してたべてしまつて骨だけ埋めてしまったという、恋の犯罪の話も書かれている。

だがしかし、そうした未開の人たちにも宗教はあるのである。世界には未だに首狩りや人喰いの風習を残すと伝えられる民族がすくなくある。しかしそれらの人々も部落の者が死ねば必ず葬式を行い、死者の霊を祭っているのである。中央アフリカの蛮族とて同じことである。妻を殺して喰べてしまった若者の行爲も異常な恋心のためだとして釈放され元気で病院の手伝いをしているということだが、これなども一概に牝をあばらつて死闘する動物に比することは出来ないだろう。人間的な情感——これが宗教の發現となり、文明のあけぼのになったのではないだろうか。

三日飼つた魚や動物が死んでもたべたりする気になれないのが人間である。まして苦菜



文化のあけぼの

を共にして永年つれそつた妻子が死んで悲しみ嘆かぬ者はあるまい。それを丁重に葬り、あとあとまでとむらうのも、愛の情念の自然な発露であらう。宗教を否定する主義者もレニン廟を崇拝する。それが自然の情愛なのである。動物にはそれが無い。母親の愛情はあっても、死という事実への理解はないのである。死んだ者への愛著、生ける者へと同じ死者への愛情、それは永く人間の胸中を去ることがないのである。人間の歴史のあるところ、必ず宗教の痕跡が、言いかえれば死者弔葬の事実が伴っているのは、それ故なのである。「あらゆる生物のなかで人間だけが死なねばならないことを知っており、それを経験から知るのである」とヴォルテールが言っている。人間だけが死ぬので動物はただくたばるだけだともいわれる。ジークムントは母猿は本能的な母性愛から死んだ子猿を幾日か世話をやくが、腐り出すと寝かせたまま放置してかえり見ないといっている。しかし人間だけは死の悲しみ、死別の悲しみを理解する。人食い人種ですら仲間うちの死には弔葬の儀礼を以て報い、動物のように屍肉をあばらうことはないのである。

この情感、死者への尽きせぬ愛情こそが、人類の文明を發展させた淵源ともいえるであらう。先立った者への愛著、その生前の言行の想い出をいつくむ心、それが人間の知識の集積となり、知性と思惟とに深みをもたらしただのである。去りゆく生命へのいとほしみ、それが生への讃歌となり、永生への憧憬ともなるのであった。自らのいのちへの愛、夫婦の愛、親子の愛、親族への愛、自然への愛、そこから宗教と文化の華が開いたのであった。

宗教の世界というとか怪奇なもの、不可思議なもの、幽霊や靈魂やなどの信仰と受けとられ易い。アフリカの未開の人の中には、靈魂は竹藪などに住んでおり・竹の葉のさや鳴るのは先祖たちが話しをしているのだと信じているところがあり、そこから鳥靈魂の信



仰を推定した宗教学者もあった。マライ人にも靈魂鳥の考えがあるという。しかし、風の音や竹の葉のさやぎに亡き人のささやきを聞く想いを抱くのは、必ずしも未開人ばかりではあるまい。わが国の民俗にも、四十九日まではまだ魂は屋の棟にいるなどといった。これとても、鳥や鼠か火の玉のようなものを想像しての話ではなかったのである。まだ本当になくなった気がしない。ふいにオイと声をかけながら入ってくるような気がする。或は雨戸を叩く雨や風の音にも、遠い海鳴りの音や空浮く雲のたたずまいにも、亡き人の面影や声音のしのばれぬこともないであらう。夜中眠り浅く亡き人に呼ばれて夢さむることもあるだろう。「潮騒にふと眼を醒まし亡き人の声聴けるがに洩ぐむなり」わたくしにも悲しい歌の想い出がある。しかしそれが人の子としてのいつわらぬ情感なのである。このような在りし日の思い出につらなる情感——いつわらぬ人間の真情の中に、故人を弔う宗教的儀礼が発生するのである。これこそ宗教の世界なのである。祈れば病気がなおし、金がもうかり、楽しい生活がもたらされるなどというのは、宗教の真の姿ではない。そうした日常的生活欲求から離れて、素樸かな人間の心情のさ中に宗教があり、念仏の信仰がある。

ただ屋の棟という表現には、それだけの根拠がある。亡き魂呼び、または魂呼びといわれる風習がそれである。人が死ぬと身内の者が屋の棟にのぼって、時には瓦をめぐって棟に穴をあけて、亡くなった人の名前を呼ぶのである。去らんとする魂を呼び戻すともいい、こうするとよみがえるものもあるともいう。だが、これは支那における風習がわが国に伝わり、次第に民間の習俗化したものだといわれる。だが、こうした習俗の根源も、人の正に死せんとする際の近親の者の深い歎きから、その人の身体にとりすがりその名を呼ぶ自然の情の発露からの行為の儀式化であることはいうまでもあるまい。



このように宗教の儀式は、その表面は様々な過程から様々な彩色をほどこされているにせよ、そのもとは自然な人間の真情のさ中にあるといえる。

お盆やお彼岸に亡き人の霊を迎えその冥福を祈る行事の中にも、わたくしは人間の素直な故人への愛著心、深い人間的な情感を感じずにはおれないのである。

枕冊子に「ただ過ぎに過ぐるもの。帆かけたる舟。人の齡。夏、秋、冬。」とあるが、過ぎゆく季節への哀感、そのまゝ生命のはかなさへの諦観につらなるものである。老令を重ねるに従って、この世におけるしばしの縁えんしも尊く、なつかしいものになってくる。春夏のうつりゆきにも過ぎしものへの哀愁の念は一しお深いものである。きょう一日はきょう限り、この一日一日の人の世の連りは、一期一会の尊さをもってわたくしたちの胸にせまる。

この思い出は年と共に懐しさを増してゆくものである。友だちのこと、競争相手のこと、愛憎さまざまな想い出も、過ぎ去ってみれば懐しいものである。ましてや肉親のつながりぐらゐ恩愛の情深いものはあるまい。夫婦は二世、親子は三世というが、先祖から子孫への縁えんしは尽くることがない。この縁えんしの深さは、人として生を受けた者の心して味うべきものであらう。わたしたちはわたくし一人の力でこの世に生きているのではない。目に見えぬ無限の縁えんにかこまれ、天地一切を貫く大いなる生命の恵みによって生かされているのである。

この感懐が季節毎に先祖や亡き人々の霊を祭り、み仏の摂とく取とくを願うようにさせるのである。

み仏の大慈悲の中の祖霊らの安らぎを願うことによって、わたくしたちの生活の安らぎもまたおのずと恵まれるであらうというのが日本人の季節的行事と淵由なのである。



前進座若手ホープ

中村靖之助

坊さんは難しい

「いろいろと役はやりましたがね、坊さんには苦勞しました。仏教のことも、坊さんの生活も、何も知らないでは、この役はできません」

京都のステーションホテルの一室、仏教クラブの事務室で、中村靖之助さんは、快活に話される。一見、サラリーマン風の青年であるが、流石に芝居の話となると、目が輝いてくる。中村翫右衛門さんの姪子さんを奥さんに持つ人で、将来は、中村梅之助さんなどと前進座を背負って行く若手のホープである。

『天平の甕』で法進の役をやったのですが、随分勉強させてもらいました。又多くの坊さんにも会って、いろいろと教えを受けました。それでも、難しい役でした」

「どんな点で、難しかったです」

「そうですね。何せ、戒律生活が身について、それ自身が生活となったような人間像を、どの様に表現するかが、とても難しかったですね。自分自身、戒律生活などをしたわけでなし、頭の中で、ああそういうものかという事で理解しただけで表現するんですからね」

いかにも、難しかったという。それでも、この為に知り得たものは、大変自分にはよかったと、心から喜んでおられる様子。まだ三十六歳という若さであるが、百以上の出しものに活躍しただけあって、実力は充分と見た。

稽古前に読経した

「頭で理解しただけで、その人間が表現できますか」

「いや、できません。お経一つにしても、珠数の持ち方にしても、頭が理解しただけで、すぐ坊さんの通りやれるものじゃないですね。それでね、いつも『天平の薨』の舞台稽古の時は、一同で三宝札を読経して、穂古をやったものです」

その雰囲気をもつて感じとうろろというわけである。役者修行も、あだやおろそかでない事が、よく分った。『天平の薨』とは、井上靖の名作で、鑑真を中心とした物語である。前進座が公演した時、仏教界は随分応援をした。それ以来、前進座は、仏教界と親交ができたそうである。

「舞台に出るとき、すぐその舞台の人間になれますか」

「いや、とてもなれません。それで私などは、法進をやったときで、その舞台に出る前に、それまでの法進の生活状

況や、それまで至る経過を思いめぐらし、法進になり切るように努力します」

こうした修練は、われわれが教壇に立ったり、本堂に出たりする時に持たねばならぬ気持ちの調整と同じだなと感じせられた。

「それに、歩き方一つでも坊さん歩きというのがありましてね。丁度女方は、内輪に歩くでしょう。公卿と坊さんは、両足は平行にして、歩きます。外輪になると駄目なんです」

さて、現代の坊さんは、そんなに歩いているかなと思うと、つい吹き出してしまった。

始めは幕引き

「始めから前進座に入られたんですか」

「いいえ、十六歳の時に入座試験に合格したんですがね、その前は、鎌倉アカデミーという芝居研究会がありましてね、鎌倉の光明寺を借りて、練習していました」

とんだ所で、浄土と御縁があるものであると、皆で大笑いした。

「入座しても、すぐ芝居には出してもらえんのです」



天平の愛（第三幕第四場）—黄瀬川の岸辺—

ツハ

全く、一人前になるのも、並大ていではないわけである。

「印象に残った役所では」

「そうですね。屈原をやった時の宋玉には未だに印象に残っているよい役だと思っています」

記者も、中国の専門だけに、この屈原の芝居は二回見た。

「勿論、とても駄目です。始めは幕引きでした。それでも、アリババと四十人の盗賊とい

う芝居の幕引きで、チャンと舞台衣裳を着て幕を引き、引き終った所で、バァーと言うセリフでしぐさをする役で、これも出演という事になりましたね。アハ

靖之助さんには、今日始めて会ったつもりでしたが、已に芝居の舞台で会っていることになるわけである。前進座の出し物としては、屈原は大変評判のよかったものであった。当時、相当に騒がれたものである。

イデオロギーは芝居には不向き

「少し話が変わりますが、今の前進座ではイデオロギーはどう扱っていますか」

これは、戦後、前進座が共産イズムの前衛のように印象づけられた事についての記者の素朴な質問であった。

「芝居はですね、皆さんに喜んでもらい、楽しんでもらうものでなければなりません。ですから、イデオロギーを押し出したり、強要するような事はこの頃は一切いたしません。今日、大劇場で芝居をさせて頂くようになったのも、前進座のそうした立物が認められたからこそであると思います」

靖之助さんは、その言って、キツパリと前進座の姿を語られた。河原崎長十郎や、中村翫右衛門氏に見るように、確かにこの人々は大衆の中の役者という感じが充分見られる。

「この頃は、随分前進座も忙しんでしょう」

「いや、仲々それでもありません。誤業が発達した為芝居を長時間かけてゆっくり見てくれる人が、だんだん少なくなってきたので、興行には苦労します」

仏数クラブを訪れたのも、十月の南座での興行に、協力してもらったのであるらしい。

「なにせ、三百人近い役者や、道具方がいますし、大変です」

聞けば、吉祥寺に広い土地があり、一座の人々は皆ここに住んでいるらしい。いざ練習となると、忽ち稽古場に集り得るわけである。

「旅に出ていても、家族達は互いに助け合えるのが、こうした生活形態の特色と言えますね」

今度は「湖笛」での弥助

「最近での出しものは」

「はい、六月に新橋の演舞場でやりましたのを、九月に名古屋で、十月には南座に掛けることになっています」

吉川英治の「かんかん虫は唄う」というのと、水上勉の「湖笛」がそれで、靖之助さんは湖笛では百姓娘のものを恋いしたう弥助になるらしい。

「湖笛とは琵琶湖に関係ある芝居ですので滋賀県の人々は大いにすすめています。仏教にも少しばかり関係がありますので、又仏教界の人々に協力を得るよう努力しています。大津の仏教婦人会でも、千人は約束して頂きました。記者も滋賀県の生れだけに、つい心を引かれ「暇があったら、一度みたいですね」と、本音ともお世辞ともつかぬ挨拶をしたのだが、どの世界に生きるのも、なかなか大変なことだと、靖之助さんの話を聞きながらつくづく感じた。

(安居香山)

— 前進座公演 —

吉川英治原作
かんかん虫は唄う

— 12 景 —

水上勉原作
湖 笛

— 4 幕 9 場 —

○ 9月20日～28日

名古屋 御園座

○ 10月1日～10日

京都 南 座

ひが事にて候

大 南 竜 昇

日常化した仏教用語を整理しようという企てが、私の所属する研究室で起ったことがある。各人が分担して収拾にかかったが、その結果、非常に多くの言葉を採用することが出来た。私達が気付かず使っている言葉の中にも、仏教から発生したものが無数にある。だからといって、それが正しく仏教が広まった証にはならない。かえって仏教者にとっては迷惑を被ることが、ざらである。

その成果によると、縁という言葉を含んだ成語が多いことが注目される。縁起、因縁は仏教思想の根本である。我々が、縁から派生した多くの言葉を知らずに使っていること

は、案外、日本人に仏教の縁起思想が滲透していることを物語っているかもしれない。勿論その受取り方の善悪は別にしてである。ところで我々がよく耳として「誤用されている」と思うのが「縁起でもない」という言葉である。「あなた、今縁起でもないといったけど、縁起というのは……」と私なども説明の長話におよんだりすることがある。

この間もテレビで東京のどこかの西の市の中継を見たが、ねじり鉢巻、ハッピ姿の威勢のいいおにさんが「旦那縁起ものですね。一つ買ってらっしゃい！」とやっていた。江戸っ子は地方人に比べると、かつぎが多い

と聞く。北海道から出てこられたある先生が「北海道より東京の方が、なにかとこだわる人が多いのに驚いたよ」と話されたことを思い合わせての話である。

いわゆる近代化が進んだ都市に、こうした現象が見られることは、意外な気がする。まして習俗において近代化の後れた、特に保守性の強い地方では、これらの慣習は根強く残っているのではなからうか。

実際我々が社会生活をする上に、特に隣人との交際においては、守らなければならない社会常識としてのルールがある。しかし風習とか、しきたりには、ほほえましいと思われるものは別として、排除するか、改善しなければならぬ点が多くあるのではないだろうか。殊に既成の、しかも実行するために悩みの種となるようなものにはそういうことがいえそうである。

仏教者は、既成の慣習、たとえば迷信、俗信に類するものに対して、どのような態度を示すべきであらうか。

仏陀は、合理的で、しかも鋭い批判力と思考の持ち主であったといわれている。

法句經「世俗の章」の最初に世尊はいう。

取るに足らないものごとに従つてはならぬ。放縱に生活してはならぬ。いつわりの見解にしたがつてはならぬ。世間の友がらとなつてはならぬ。

周知の通り、原始仏教の時代は新旧思想が交錯し、雑多な俗信、迷信を持するバラモン教等に代つて、仏教をはじめとする革新的な宗教が興起する変動期であつた。仏陀はこれらの古い宗教儀礼と無意味な慣習に対して厳しい批判を行ったようである。

仏陀以後の仏教者が行つた、仏教伝播地域の民衆の俗信、迷信と慣習への批判の系譜を追つていくことは、興味ある問題ではなからうか。

ところで話が少し飛躍するが法然上人の慣習、行儀への批判的態度はどうであつたろうか。

宗祖の講座に連なつた在俗の信者達への一見素朴と思われる多くの質問と応答を綴つた「百四十五箇条問答」の中に、その有様を尋ねてみよう。

この問答集の中に、比較的多く見られるこ

とは、質問者が、自分達の生活を振り返つて浄土教の説く罪の意識に注意していることである。ただしそれは浄土教の罪悪感の中でも極めて素朴なものといえよう。最初にあげるのは我々がよく耳にする飲酒に関する回答である。

一、さけのむは、つみにて候か。

答。ま事にはのむべくもなければ、この世の習い。

「本當言つたら君、飲んじやいかんよ。しかし、これも世の中の習慣でな」私には、宗祖が酒を好まれたかどうか、定かには知らぬ。

御自身では飲まれなくても、いかにも好みそうな問者の真剣な態度をみて、思わず「まあ適当にやれよ」と答えられたのかもしれない。

また、この問答は、飲酒が罪であることを知りながらも、犯さずには生活できない人間の業の深さを教えているかにみえる。問う者と

答える人の、罪の受けとり方の深さが變つていることを読む人は気づかねばならない。宗祖の答には「御心によるべき事」「御心にまかせ候」という返事が多い。これは一見、相手の意志を尊重した宗祖の温和な性格を連想

させるが、裏がえせば、相手を突離して甘えを許さない厳格な気性と、あくまで問者自身判断を求める知性的な一面をのぞかせているのではないだろうか。

もし私が、宗祖に「御心にまかせ候」なんぞと答えられたら、その場に坐り込み、考え込んでしまうこと必定である。宗祖の聲の響には、他の自律主義を喚起せずにはおかまい何物かがあつたはずだからである。

また信者達の問題意識の中に、罪と共に忌の意識が強かつたことがしられる。

「いみ」には、仏教の戒をうけるという意味や、物の崇のある時など、日数を定めて謹慎するという意味があるが、一般的には、後によくないことが起るから避けるべきだという意味合いで用いられていたようである。

この種の忌観念は、現代人の間にも根深く続いている。

一、産のいみ、いく日にて候そ。又忌もいく日にて候そ。

答。仏教には忌という事候はず。世間には産は七日、又三十日と申けに候。

忌も五十日と申す。御心に「まかせ」候

解答のはじめに、仏教では忌などは問題にしないという態度が表明される。しかし我々がここで注意しなければならぬことは、宗祖が世間で行われていた忌の常識に明かされたことである。この時の「御心にまかせ候」という締めくくりの言葉の中に複雑な重さが感じるのは私だけではないだろう。

一、いみの日、物語して候はいかに。

答。くるしからず。本命日も。

「心配ないよ。誕生日だって、寺詣りは結構だよ」という答には宗祖の面目躍如たるものがあるではないか。

また「赤子が生まれて、百日間は不浄であるといわれ、社寺に詣でることは差障りがあるといわれますが」という間に、「そんなことはない。なにもきたないものは赤子の不浄に限らないよ。赤子の不浄より、あなたの心の中を覗いてごらん。きたないものばかりじゃないか」

これらの問答をみてみると、宗祖の対機説法の妙を窺い知ることができる。同じ間に対して、ある人には否と答え、別の人には肯定しながらも反省を促す簡潔な応答の中に、偉

大な宗教家の人格が滲み出ている。問者の頭を一杯にしていた疑惑は、これらの一言、一言によって一掃されていったにちがいない。

一、精進の時、爪きらぬと申、又女に髪そらせぬと申候、いかに。

答。みなひが事。

一、五色の糸は、ほとけには、左にとおせ候き。わが手には、いづれの方にて、いかが引き候へき。

答。左右の手にて引き給ふべし。

この二つの問に対する宗祖の答えは、行儀の形式化に対する批判と受取ってよいだろう。

精進潔斎の時に爪を切つてはならぬ。女子は髪をそつてはならぬといった些細なことは、人生の大目的の前には僻事だと喝破したのは、宗祖の歩みが、ただ人生の正道をまっすぐ歩んだことを我々に教えているのではないだろうか。

五色の糸云々とは、臨終行儀をいったものである。当時は恐らく、源信の往生要集等に説かれている行儀が行われていたにちが

ない。往生要集では、四分律抄を引用して、「病者は左の手に幡の脚を執れり」と記している。宗祖の答は「全手に引く」と、従来の行儀には目もくれない。要は西に向つて心から念仏申すことに外ならなかったからである。

宗祖においては、形式もさることながら、精神が重要視されている。次の二つの問答がそのことを我々に教えている。

一、懺悔の事、幡や花籃なんとかざり候へきか。

答。さらても、ただ一心そ大切に候。

一、神仏へ参んに、三日一日の精進、いづれがよく候。

答。信を本にす。いくかと本説なし。

法然上人は、既成の形式化したものを貴ぶことより、その底に流れる精神を尊重しようと努めたのではなかったろうか。これらの行き方を推進したのは、宗教体験に裏づけられた旺盛な批判精神であり、近代性であったろう。もとよりそれが、民衆への深い愛情に根差していたことを我々は忘れてはならない。

御歌をいただく

あみだ仏と心は西にうつせみの

もぬけはてたるこゑぞすゞしき

(勸修師伝第三十)

「うつせみ」は蟬のぬけがらと現身との双方の意味があり、しかも移すとのかけ言葉であります。「もぬけ」は蟬が脱皮することであります。そこで御歌の意味は

南無阿弥陀仏とお念仏となえて、心は西方極楽の方向に移っているがこれは丁度蟬が外皮を脱して鳴きつづける声がいかに清く涼しく聞えるように、現実の罪惡生死の肉身から全く脱しきって、お念仏の声がいかに清く涼しげに感ぜられる。

ということになります。心のうちは、すでにここになく、残る声のみが法悦を思わせるということでしょうか。

この御歌から夕方にカナカナと美しい声を響かせる「ひぐらし」を思い起させます。残暑といっても日中の暑さがなかなか去らず、

どうやら一日の仕事を終えてホッとした時、庭に水でもまこうかと思うと、一きわ大きくひぐらしの声が聞えてきます。すると一日中の苦勞はどこにか消え去って、すがすがしい楽しい気持になります。毎日の雑用に追われ時にはどうにもならぬ気持のために、ただ苛々するばかりで苦しみますが、少しは気持も静まりお念仏となえた時は、ほんとに活き迫ったようになるものであります。

またこの御歌から日中に絶え間なく鳴き続ける蟬の声を思い起させます。法然上人はお弟子に対して

「總じては一食の間に三度ばかり思ひいださんば、よき相續にてあるべし」

と教えられ、食事をするのに、三度ばかりお念仏を唱えるようにといわれました。しかしご自分のこととなると、大部様子が異なりました。つまり

「源空は、大唐の善導和尚のをしへにしたがい、本朝の思心の先徳のすすめまかせて、称名念仏のつとめ長日六万遍也。死期やうやくちかづくによつて、又一万遍をくはへて長日七万遍の行者なり」

と仰せられています。少々下種な話ですが一日を千分とすれば、一分間に七十遍以上のお念仏を唱え続けておられたことになります。容易ならざる行者と申し上げるしか言葉がありません。經典に

「仏名を称するが故に、念々の中に八十億劫の生死の罪を除く」

とあります。お念仏の一声一声の中に、八十億劫という無限に近い長い間の、私たちが犯してきた罪業が消えるというのですから、七万遍のお日課を勤めておられた上人の心情は想像するだけでも感服の外はありません。こうした上人が、ご自分の気持を蟬にたとえて、「こゑぞすゞしき」と仰せられたことは自然と襟を正させるものがあります。

しかし上人の勤行に、近ずきたいとは思いますが、とても真似ができそうではありません。ある人が同じようなことを質ねましたところ、上人は次のように答えられました。「念々にすてざれとをしゆる事は、人のほどにしたがひてすすむ事なれば、わが身にとりて心のよび、身のはげまん程は、心にはからはせ給ふべし」

(村瀬秀雄)



四 苦 八 苦 — その一

毒 矢 の た と え

渋 谷 賢 応

青年の集いの際、次のような質問が出ました。

「なぜ浄土を願わなければならないんでしょうか。なぜ阿弥陀さまにおすがりしなければならないんでしょうか。われわれは今、すべてが楽しいんです。この世のすべてが楽しいんです。それなのに、なぜ念仏しなければならないんでしょうか。」

これは素朴な質問です。これに応ずる答はいろいろあります。ましよう。「君はほんとうにこの世を楽しいと思ってるか。美しいと思ってるか。」「君の楽しんでる楽しみは皮相の楽しみであって、ほんとうの楽しみではないと思う。」「君はまだ人生を知らない。」など。しかしこれはこの青年にとって、納得のいく適切な答とはならないのです。

お釈迦さまがさとられて仏教をお説きになったそもその

出発点は、「人生は苦なり」と断定せられたことより始まります。「苦」であると言うことをほんとうにしみじみと味うのでなければ、浄土をよろこび願うことも、真剣にお念仏をすることとも言っても出てこないと思うのです。したがってさきの青年の質問にはそのままいいと思います。なむあみだぶつ」です。他日この青年の人生航路に苦の波がおしよせるまで。

「浄土はほんとうにあるのでしょうか、阿弥陀さまはほんとうにおられるのでしょうか。もし、ほんとうならお念仏も真剣にしましょう。それがわからないうちはどうもまじめに念仏が申されません。」

このような質問もよく出ます。これも「苦」より出発していない所からくる質問のようです。これについては中阿含経の有名な毒矢のたとえが思い出されます。

「マールンキア童子は独り思惟した。『世界は尽きるときがあるのかないのか、身と心とは同じなのか異なるのか、生命は終るのか永遠なのか、わが師釈尊がこの大問題を説かれたいのはなんとしても我慢できない。もし私に正しい答を下さるならよし、さもなくば、師をけなして去り、もう仏道の修行などほしくない』こう決心してお釈迦さまにそのことを質問された。釈尊は『そなたは世界が常住か無住か、有限か無限か、靈魂と肉体とは同じか異なるか、人の死後の運命はどうなるか、それらについて説かない間は修行しないと云うが、それを知ろうと思えば、それをきわめるだけで、途中で命が終ってしまいますよ。ここに毒矢が体につきささった人がいて、家中のものがかけつけてこの矢をぬこうとしたのに、さて、この矢についてわからないことがある。それを知らなければぬくことはできぬ。この矢を射た弓は、山ぐわなのか、桑なのか、けやきなのか、角なのか、その弦は、牛の筋なのか、糸なのか、鹿の筋なのか、また矢は竹なのか、木なのか、矢羽は鷲なのか、鶏なのか、鶴なのか、矢の根は茅なのか、刀なのか、それがわからないうちはぬくわけにはいかぬ』と言ったらどうでしょう。その一つを知ることができないうちに命は終るでし

よう。

味うべき教説です。仏教は苦より出発しているのです。浄土も、阿弥陀さまも、この苦の時点に立って体認するものでなければわからないし意味ありません。

浄土西方にありや、この世にありや、阿弥陀仏とはいかん。このようなことが實際今現に論議せられています。それは論議としては興味深いものでしょう。けれども今現に命終る死の苦しみの中にいて、はたしてその論議が尽されるものでしょうか。親の柩を前にして、子のなきがらを前にして。

仏教は苦を起点とする以上、いかなる宗旨宗派を問わず、拔苦与樂の教です。離苦得樂の教です。それが現世利益であろうと来世往生であろうと、正しい苦の認識の上に立ち、正しい拔苦の法を求める姿が仏道の正しいあり方だと思ふのです。

さもないと、自分の宗も見失い、また、仏教の中より出ている新しい宗教の正しい批判もできないと思ふのです。

— ○ — ○ — ○ —

お茶をおいしく

—その9—

煎茶の中の普茶料理



黄 檗 幽 茗 流 家 元

三 浦 純 亭



煎茶につきものの懐石は普茶料理でございます。御家庭でおそうざい用として手軽に出来ます二つ、三つをしたためさせていただきます。

中国の諺に

生は蘇州に有り（子を大切に育ててくれる所）衣は杭州に有り（衣数が豊富で安価）食は広州に有り（食物豊かで料理法が発達、味覚よし）

と云われておりますほど福建広東料理はよく研究つくされていると申されます。

隠元禪師の侍者をつとめて日本に渡った煎茶及び普茶料理は禪師の先住された「食は広州に有り」と云う中国福建省の生まれで有ることに、なるほどとうなづかれます。この料理は野菜を主と致しますが、脂肪源には胡麻油を使います。四人一卓として一つの器具から取り分け、同じ食物を同時に分け合って頂くところに和音の中を示します。

「普茶」とは神仏にそなえられた生のままの山の幸、野の幸をおさげして、一物も無駄にせず、一葉も尊重して作るもので、その代表が「雲片うんぺん」です。

これは、切りくずのすべてを利用し、胡麻油で炊め煮して、砂糖、醬油で味をつけ、吉野葛をかけますが、昔、托鉢に行き、厨に捨てられた切りくずを寺に持ち帰り、料理したことからも云えると、伺いましたが、要するに物の感謝の念を表わした料理です。普茶料理で特徴のあるものは、この「雲片」と「麻腐」（胡麻豆腐）であります。禪宗の茶礼とは接心（坐禪）や大行事の際、全山の人が一堂に会し、作法に従ってお茶を頂き、行事の注意や意見の交換や打ち合わせをすることで、その行事が終わると再び茶礼を行って締

結をします。このあと「謝茶」(御苦勞呼び) があります
が、この御馳走が「普茶料理」であります。

本月は普茶料理の代表とする「雲片」を十月は麻腐(黒槩豆腐)をしたためさせて頂きます。

雲片の作り方

材料(十人前)

油	三匁	砂糖	二十匁
醬油	五匁	吉野葛	一合
ごぼう	七十匁	ぎんなん	一合
ゆりね	四十匁	グリーンピース	少々
たけのこ	二十匁	人參	三十匁
れんこん	三十匁	きくらげ	三匁
しいたけ	十匁		

野菜の切り方

- 一、ゆりね 一皮ずつはずして洗っておく。
- 二、きくらげ 水に細くきざみおく。
- 三、グリーンピース 水洗しておく。(色彩上必要)
- 四、しいたけ 水につけおきたるものをしぼり、二分位の幅にきざむ。この水は捨てずにおく。
- 五、ぎんなん 打ちくだき薄皮をむき、水炊しておく。(この時木箸でかきまぜると薄皮がとれる。)

六、この外の野菜は、長さ八分、幅二分位にきざみおく。

たけの子は季節はこのまま、季節はずれば缶詰を使用、これも長さ八分、幅二分にきざみおく。

作り方

一、油でいためる。

ごぼう、きくらげ、たけのこ、ぎんなんと順にいため、よく一緒にかきまぜ、昆布だしと先程のしいたけのつけじるを入れて蓋をして煮ます。

二、ごぼうが煮えましたら、人參、蓮根、ゆりね、グリーンピースと順に入れ、蓮根が煮えたら砂糖大さじ二杯(好みにより増減)、醬油五匁味を見ながら好みにより増減する。しかし、辛味の方が美味しい。

三、五匁の葛を二合の水にてゆるめ、全体にかけ、かきまぜる。すぐ蓋をして暖かいうちに饗する。

盛りつけ

一皿盛四人であるが、盛付けたらけしの実少々ふりかける。なければ白胡麻でもよい。

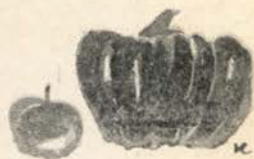
れんこんがしゃきしゃきと中で鳴り、人參の赤さがあざやかに心にしみ、ピースの青味が美しければ上出来で有りませ。どうぞ一度おためし下さいませ。

浄土宗のおしえ <8>

浄土三部経について

その 1

丸 山 博 正



よく「お経は聞いていても、さっぱり分らない。」という言葉に耳にします。また「分らないけれども、なんとなくありがたい気がする。」などという人もいます。いずれも正直な発言だと思います。そして簡単に見過ごしてはしまえない問題であります。そこで今月と来月の二回は浄土宗の依りどころとなっている「無量寿経」・「観無量寿経」・「阿弥陀経」の三部経を中心に、「お経」について述べることにします。

た。

ご存知のように漢字には音と訓があります。普通の会話で、子供さんでもそのまま意味が通じるのは訓の方です。例えば「山と川と草と木」と言えば誰でも分ります。これを「山川草木」と言うと、大人でなければ分りにくくなります。これが音の方です。経典を読む場合、分りにくいのは、この「山川草木」式に読むからです。しかも、現在一般に用いられている漢音より古い呉音で読まれているからです。今の「山」は漢音ですが、これを呉音でいうと「山」となります。もともと漢字というものは中国のもので、日本に入ってきたときは「山」は「せん」か「さん」だったのです。それを意味をとって、日本語に当てはめたのが訓なのです。そこで「山」を「やま」とも読むようになったのです。ところが経典の場合、一字一句もおろそかにせず大切に扱われる性質のものですから、訓に当てはめて読む（これを訓読といいます。）ことなく千年以上も受け継がれてきました。漢字そのものに対する関心が薄らいでいる現在、呉音読の「お経」が分りにくいというのは残念ながら否定できないことです。

しかしながら長年にわたって築きあげられた音読の「お経」には宗教的感情を盛り上げるべく非常な努力がなされてきたのであります。特に浄土宗のお経は洗練されていると言

われています。例えば木魚の打ちかた一つにしても、よく聞いていると分りますが字と字の間に打っています。ナムアミダ仏の場合なら「ナ」と発声して、次に「ム」と発声するまでのほんのわずかな何分の一秒間に木魚を打っています。これは「ナ」と発声すると同時に打つよりも人間の耳に、なかなか感じ、しみじみとした感じをあたえるからなのです。

これは一例ですが、浄土宗の「お経」は、すべてにわたって、実に細心の努力が払われてきています。はじめに「分らないけれども、なんとなくありがたい。」と書きましたが、ありがたいのは、なんとなくではありません。阿弥陀仏の救済の「ありがたい」を如何に人々に伝えるかを真剣に考え続けてきた努力の結晶が浄土宗の「お経」なのですから、ありがたいのが当然なのです。

さて、音読では分りにくい、しかしいきなり訓読にしたのでは宗教的感情の盛りあがり不足し、あじけのない儀式になりがちである、という矛盾を解決すべく、現在は一部に訓読を取り入れて法要を行うようになってきています。また訓読でも大木教夫先生の「和歌六時礼讃」のような、すぐれたものが出現しています。時代に適した浄土宗の「お経」の確立に絶え間ない努力が払われております。そして最も大切なことは、一人一人が「お経」を理解していることです。詳し

くは来月号にしますが、浄土宗の日常勤行式を見ますと「香偈」・「三宝礼」・「奉請」などの偈文があります。普通お経をあげていただくと言う「お経」とは全部が三部経なのではありません。心身を浄め、三宝を拝し、その法要の場に阿弥陀仏、釈迦をはじめ十方の諸仏を、おまねきする等の偈文があり、その場が、仏会になり、おごそかな気分がととのったところで、はじめて三部経が読まれるのです。ですから、偈文の意味するところや、三部経の内容をよく理解して法要にのぞむことこそが、浄土宗の「お経」を真に意味あるものにする根本なのであります。

浄土三部経とは、言うまでもなく「無量寿経」・「観無量寿経」・「阿弥陀経」の三経を言います。宗祖法然上人は一切の經典は、すべて、結局は往生浄土を明かすためにあるが、専門に直接それを説かれているものとして、この三経を所依の經典とされました。所依とは「よりどころ」という意味です。今月は三経の「無量寿経」について述べることにします。

「仏説無量寿経二卷」は康僧鎧コンソウガイという人によって訳されました。「阿弥陀経」というのに対し「大経」「大無量寿経」とも言われ、また二卷なので「両卷経」「双卷経」など呼ばれ

ています。本願の義を説いたので「四十八願經」と言う場合もあります。阿彌陀仏の本願と救済の本旨を説いたものとしてあまりにも有名であります。これからこの無量寿經のあら筋を述べて、重点的に解説をしてまいります。

一般に經典の内容は、大きく見て、三つに分けられます。

第一は序分で、これはその經が説かれるまでの経過です。第二は正宗分で、その經の述べようとする内容です。正説分とも言います。第三は流通分で、その經が如何に利益があるかを述べ、正宗分で説いた内容を後の代までも伝えることを勧める部分であります。これを無量寿經について言いますと、初めの如是我聞から阿難諦聽今為汝説対日唯然願樂欲聞という所までが序分です。ある日釈尊が王舍城耆闍崛山で無数の弟子達に囲まれておられます。いつも釈尊についている弟子の阿難は、その時の釈尊の御顔が、ことの外輝いているようなので、その訳をたずねます。釈尊は、自分がこの人の世に出現した目的を述べる時期が今日到来したことを喜んでいるのだとおっしゃいます。そこで阿難は、どうかその内容をお聞かせ下さいと、お願いして、いよいよ教説がはじまることになります。こうして書くとも何でもないようですが、ここで重要なことは、釈尊が人の世に出られた目的を述べる日が到来したということです。釈尊がこの人の世から、おかくれに

なった後の世の人々は直接釈尊の説法を聞くことが出来ません。仏を失った人々は何を頼りに生きていくべきでしょう。しかし仏なくして法だけを頼りに、人々が自分の力で修行して悟っていきけるものでしょうか。このように考えてきまして、この日釈尊が、永遠の現在仏である阿彌陀仏の凡夫救済の原理を、お説きになったということが、重要な意味を含んでいることに気がつくのです。

次に正宗分は、乃至過去という所から下巻の終りの方の略説之耳までです。ここでは人々が生老病死から離れて、悩みのない状態になり、悟っていくには、阿彌陀仏の救済に依る以外にないことが説かれます。先ず、その阿彌陀仏の成り立が説かれます。釈尊以前にこの世に出られた仏の一に世自在王如来がおられました。時に法蔵菩薩という方が、衆生救済の願をおこされます。そこで法蔵菩薩は世自在王如来の所に行き、自分の大決心を述べ、衆生救済のための浄土をどのようにに作つたらよいかをたずねます。仏は実に二百二十億という多数の浄土の例を法蔵菩薩に見せられます。法蔵はその後、五劫（一劫とは天文学的な長年月を言います）の間、思いをこらして衆生救済の道を求め、かくして再び世自在王如来の所へ行き、礼をなして、具体的に浄土建立の内意を述べられるのです。これが有名な四誓偈と四十八願の所で

す。それから法藏は菩薩としてなすべきあらゆる徳目を修行せられ、遂に阿弥陀仏という仏になられたのであります。現にその浄土は極楽として永遠に存在するのであります。その浄土はこの世で考えられるあらゆる形容を以て説かれております。次に衆生がどのようにすれば阿弥陀仏の浄土へ救われるかが説かれます。言うまでもなく四十八願の中の第十八願の、人々が阿弥陀仏の名を聞いて信じて、心から念仏することとが、たとえ一声であっても、極楽に生じ、仏になつていく、ということが根本でありますが、人々の信仰に対する程度には、いろいろ差があることを示されるためこれを三輩に分けて説かれています。これを上・中・下の三輩と申します。観無量寿經の項で述べますが、善導大師は人々に三輩とか、更に各々を三に分けて九品とか差別があつても仏からみれば、すべて凡夫なのであるという人間觀を、はっきりとさせられています。次に釈尊は、弥陀の浄土が、あらゆる浄土の中から選りすぐられた最勝のものであるのに対し、この人の世は仏の眼から見れば、種々の深刻な様相を呈していることを説かれます。これを五段に分けてあるのだ五惡段と称しますこのように浄に対する穢を説いて、ますます阿弥陀仏への帰依を勧められています。

最後に流通分は仏語弥勒菩薩に対して、改めて称名念仏の

功徳を述べ、

「私がこの世を去つてからも、また末の世に仏法が滅びてしまふであらうとも、この經だけは百年間ここにどまるとあらう。仏の出世（この人の世に出現する）にめぐりあえることは、むづかしいことである。今、私は出世して、わが思うことを総て説き終つた。この法を末代まで伝えよ」

という意味のことをおっしゃいます。そしてこの教えを聞いた無數の菩薩・声聞・衆生は歡喜して踊りあがつたのであります。

以上、紙面の都合もあり、はぶいたところもありますが無量寿經について概説しました。仏がいなくなることがない、永遠の阿弥陀、その阿弥陀を信じて称名念仏すれば仏の所へ行ける。

そこはあらゆる仏国中最高の極楽である。考えれば考えるほど本願成就を説いたこの無量寿經の衆生救済の精髄のありがたさが、非常な現実感となつて、私共の上に光り輝くのです。

釈尊の慈悲に直接に接することが出来た人々と同じように、私共も、今、現に阿弥陀仏の救済清の光を受けているかうであります。



木魚の音

木村無外

観音寺は京都市〇〇区××町に大きな楠と数百年の間、秋には必ずと云ってよいほど実を結び、世の無情と、そして裏腹には風情さをも感じさせてくれ、今日は特に一昨日の雨によってか末枝に致るまで綺麗に洗滌された精であろう、その葉一つ一つが鈍い緑光をあたり一面に輝かしく放ち、それはあたかも莊嚴浄土の世界海を連想させ、神秘性、象徳性を具備していると表現しても過言でないほどの落葉喬木に包まれた浄土宗の古い寺である。

ここ二年前から東西は高速道路が横断し昼間等は車の放つ騒音が以前の冷静を全く打ち破り、何もこのことは××町に限った事では

あるまいが特に最近ひどく、春を運んでくれる小鳥の鳴声すらも貴重なものになってきた。例年の通り定期的にやって来、家族の者とも仲良しになった彼のつばめ君はいまだその特徴ある優雅な装いを見せてくれなくなつた。

「つばめちゃんはどうしたんやろう」と幼い子供の美代が背中にフランス人形を背負い、今年生れたばかりの真白い子猫を両手に抱きかかえて、長い蔓を下した藤棚のすみを指差す様はいじらしく、当寺に随身する私でさえ寂寞さと子供に対する返答に躊躇するものである。寺の周囲こそそのように年々変化するものの××町に生活する住民にとって、その神秘的な落葉喬木は自分自身の過ぎ去った

幼児期、少年期、青年期等の思い出がいっぱいつつまれ、全くそれによって醸し出し、描かれ、物語られ文字通り絵巻の如く心の深处にくつきりと止められ、町内の道辺を論ずる時先ずその巨樹が釘付けられる様はあたかもそれを証明するかの如く思える。そしてそれを基点に東西南北と区劃し、初めてこの地を訪る人には有無を問はず、まるで定型化された公式のように教えてあげられる程住民にとつてその落葉喬木と古寺に対する観念は一種の巧妙心であり、精神的な安らぎを与えてくれる唯一の栄養源となり、私もそう思いそう信じ四年間を無意識に過して来た。

香味高い楠の間からわずかの勾配を見せる
本堂の尾根にどこより逸れ来たのであろうか
白と薄茶の二羽のハトが戯れている。そんな
古寺に三橋真樹子（仮名）が訪たのは六月二
日、暗い、重しい、しめっぽい空気に乗っ
て、鉛色の雨雲が重なり合い、もつれあう
空、五感すら正常に保つ事が不可能とさえ思
わすような朝、子供の悪戯で十分少々遅れぎ
みな古時計が丁度六時を歌ったから、正しく
計算すれば六時十分か十五分という頃になろ
う。白蠟の如く白い顔は決つて人間とは思
い得ないが、薄べらい薄紫の草履と、花模様
を形どる刺繍の入った真白い長袖シャツそ
れに青と紫との混色した折目正しい紺のスカ
ートを付けているからにはやはり人間であろ
う事には相異あるまい。

行く本当に通ず以外振舞うべき計らいは容易
に見つけ出せなかった。私は当人の身軽な様
相からして多分夫々喧嘩か何かであらうと安
易に考え、殊更その経緯を問う気はなく励ま
す道理はなかったが、随身用にと宛行えた私
の部屋が本堂の片隅にある為どうしても本堂
に入らなければならなかったのが事の始まり
である。



さまを入れて下さい」
「病院を脱けだして来たのです。皆なが心配
していると思います。この御恩は一生忘れま
せん。すみませんがここに居るという事を知
らして下さい。すみません……」と何彼に怯
え今にも滅せんとする燈の如くひ弱い声を感じ
心するほど次々に流出する涙と共に悲願する
のでした。……さてその間の細い経緯は紙の
関係上詳述出来難いが、取急ぎ彼女という病
院に掛込むと、「いやーそうですか、何はと
もあれ安心しました。……寺に入り込んでい
たんですか、いやー病院としては四方八方に
手を廻しているんですよ。なんせ五時に起き
てから当の姿が見えへんのや、家族の者も
心当りを索しているんですよ。まさかと思
いながら鴨川の方にも車を飛ばしているんで
よ……」とお互に顔を見交す状態でした。
ここで××病院の診断書を要約すると次の
様になる。
三橋真樹子26歳、19歳にて結核発病、日赤
に入院、一年後退院、一年間家に安養、四
年動続中職場結婚、結婚後一年七カ月目に再
発、当××病院、六月二十日に入院、……国

立、その他諸々の病院に通ったが、芳しい答えが得られず、今回の再発で気弱な性格から人生に対する悲感が勃発し、ノイローゼになったのではなからうか？」……という事になる。

さてそれはともあれ彼女が当時駆け込んだ動気を詮索することが先ず問題解決の糸口になるのであらうし、診断書の絶対的な証明づけになるであらうと思う。

「胸がイライラするんです。お医者様は心配するな、昔とちがつて近頃は良い薬も出来ているしきな、ごう養生すればきつと治るさかいと言いはりますけどな、またでしやろ、あれ十九の時や思いますねん、その時はまだ初めてでしやろ、それにまだ一人身ですし、母さんも父さんもいてたし安心して養生することが出来たのですねん、だから一年くらいで早よう治ったんでしやろと思ひませねん、でもな今度の立場は全く別でしやろ、というのは一年七カ月前に結婚して今町に主人と二人で生活していますねん、それで実は困りますねん、

そりゃあ子供の産めへんのは仕方がおへんどす。けどな主人がずいぶん心配してくれまねんや、洗濯かて会社から帰ってしまひまねん、勿論兄弟達かておんなじどす。けどな、そんならうち誰れの為の嫁かと思ひますのや、みんながようしてくれればくれるほどなんやよこの（胸をさして）ところがきゅつと絞めつけられる思いがしますのや、たしかに幸福かもしれまへん、でも私にしたらそれが逆で重荷になるのですねん。うち小さい頃から弱い性質としてな、もしかして今度の再発が頭にきて精神病になつたらどなんしようかと思ひましたのどす、そんなら一掃の事死んだら楽になるやろと思ひましてな、今朝五時に起きて、電車にしようか、車にしようかと歩いているうち遠くの方から何や木魚の音が聞こえますねん、私な京都に生れながら子供の頃から一度も寺なんて入った事がおへんどした、以前の病氣の時かて決してそんな事思つてもみませんどした。けど不思議なもんどすな恥ずかしいとか、死にたいとかいう気持は全然無うなつてここに駆け込んだのどす……」

さて何や彼やとごもくそばの如く雑記したが、要は「木魚の音は生きている」という一言に過ぎない。そんな事は当然だといえばそれまでだが、私が考えるに、日本民俗意識からしても、その木魚の音は庶民の生活の中にくつきりと物語られ文学、音楽に致るまで多くのイメージとして我々の心の中に伝えられて来た。朝の一時、夕の一刻に聞る木魚の音は、子供、青年、老人とその受取り方の相異はあれ、やはり何かを考え、夢みさせ、あわよくば人間としての誠の道を覚めさせてくれる貴重な投薬とさえ云えるし、特に現在社会はめまぐるしく、それがめまぐるしければめまぐるしいほどその効果が在るものであり、かつ換言すればその無は現在最も必要親される精着の実定済ではなからうか、……ただ今

『その音は生きていた』と通感する次第である。
木魚は叩くべし。

連	繪
続	話

みんなの法然さま

—法難はつづく—

高橋良和

さしえ 小林健造



法然上人の亡くなったことは、諸国の信者につたわっていった。まるで小さな石の波紋が、池全体にひろがるように、口から耳へとひろまったのである。

その頃、諸国の人々はこの上人の亡くなったことをいろいろな靈感で知らされている。

たとえば花園天皇の侍女は、一月二十四日の夜の夢に、東山の古水のあたりに紫の雲がただよい、まるで幕をひいたようになっているとか、仁和寺の比丘尼西妙は、二十四日夜には、翌二十五日に上人が亡くなるという予感をうけて、あわてて上人のもとに飛んできて御臨終に会ったり、またある人は、金色の光が四方を照らして日光がかくれてしまったように感じたなど、奇端は数多いのであるが、これも上人の偉大さを物語るための日世の人の美しい表現であるといえる。

然しとも角も日本の宗教界の偉人である、法然上人は亡くなったのである。

亡くなってからの中陰は法蓮房信空の主張によって、七々日の仏事を営んだのであるが、初七日には導師に法蓮房信空、二七日は求仏房（ぐぶつぼう）三七日は、住真房（じゅうしんぼう）四七日は、法蓮房、五七日は、隆寛律師、六七日は、聖覚（せいかく）七七日は、三井寺の公胤（こういん）がそれぞれ導師をつとめたのである。

こうして門弟たちによる、亡き師を偲ぶ法要は滞りなく終わったのであるが、一方においてはまだまだ念仏を非難する動きがあとをたたなかった。

これの一ばん大きな事件は、嘉禄の法難といわれるもので、凡そ日本の仏教の各宗祖のなかで、法然上人がうけた法

難ほど宗祖に鞭うった事件はないので、如何に法然上人が日本仏教に大きな革命をあたえたか、また大衆を動かす力をもっていたかは、この法難をみてもわかるのである。



それは御

堀川天皇の

御代であ

る。

下総の国

から比叡山

に勉強にき

ていた定照

なる僧が、

法然上人の

念仏の弘布

をねたんで

弾選択（だ

んせんちゃ

く）という

法然上人の

おしえを弾

該する文書

を出したことに端を反し、それに対して上人の弟子の隆寛律師が、弾選択（けんせんちゃく）という書物を出して、定照の主張を反発したのが原因で、自分の力ではためであるとなると延暦寺の僧兵の力を借りて、法然上人の門弟たちに迫害を加えたのである。

当時の比叡山には、政治的な背景があったから、直ちに皇室に訴え出たことによって、問題は大きくなり、まず第一番に弟子の隆寛、それに幸西（こうせい）が流しものに会ったのである。

今古、東西を問わず、政治はいつも宗教をうまく利用しているのは、いつの時代でも同じことであるが、亡き上人の上にも、やはり迫害の手が迫ってきたようであった。

それが嘉禄の法難といわれるものである。

そのいきさつは、すでに、天皇の耳に入って、法然上人の墓を破壊せよというお許しがあったということであるが、政治というものは、むづかしいもので、あるときは、戒師と仰いで帰依された天皇が、その御代が代るところまで一変するのだろうか、と思うほどである。

然しそれほど比叡山の勢力は大きかったのである。

六月二十二日の頃であった。

六波羅の修理亮平の時平（ろくはらのしゅりのすけたいの

ときひらなるものが、吉水の庵室にやってきたのである。

そうして、

上人の廟を撤去するから

と突然の申出をつたえたから、おどろいたのは門弟たちである。

もちろん、時平は勅命をうけてやってきたのであるから、

強願に談じ込んだのであるが、たまたまこの庵室の廟を守っていた内藤某が、この時平に堂々とたち向って、

さあ、破壊するならやってみろ、上人の御廟は反壊される
ことがあっても、わたしはお前たちを打ちたおすことによ

って、往生の門出として、殺されてもここを退かず破邪の
ために、一歩も下らず、法門を守ってみせる。

と大声をあげて立ちむかったのであるからおどろいたのは
時平である。

仏法を破壊することは、その祟りがあるとしても思ったの
か、内藤某の態度には抗しきれず、そのまま退散していった
が、然し法難はこのあともなおつづくものと想像されるので
ある。

その夜、今はなき法然上人の居間に腕を組んで顔を見合せ
る弟子たちが、数人あり、ひそひそと相談したのである。

「このようなことは、これからもつづくものと思われま

が」

法蓮房は心配そうに口を切ったのである。

いや、必ずつづくものと思います。

それなら、大変でございます。われわれのような力のない
ものでは、この御廟や、庵室を守ることにも無理かもしれま
せん

或は、上人の御廟を撤去させることにでもなりましたら、
上人に申しわけがございません。

覚阿弥陀仏（かくあみだぶつ）の顔もいくぶん青ざめてみ
えるようであった。

今までじっと聞きいていた妙香院の僧正が、

いや、われわれのような長袖のたぐひでは槍、長刀の武士
には勝てませぬ、われわれが討ち死するのはやすいが、そ
の上なお上人の御廟が破壊されてはなにもなりません。

と、いったことからはなして、

今のうちに上人の御遺骸をどこか、外の地に移したらとい
う意見が出たのである。妙香院の僧正の意見もあり、

どうだろう上人のお墓を、外に移したら、吉水のあたりを、
僧兵どもが大分ねらっているようだから

法蓮房の発言に、あたりは水をうったように静かになっ
た。一同はただウーンといって唾を呑みこんだのである。

(ある質問) 伝宗伝戒の方法

私は現在の寺院を維持運営するため、檀信徒と共に浄土の法脈を護つて十三年になります。その間昭和三十一年八月に京都仏教大における教師前期を、同三十六年七月に増上寺に於て後期を老令ながら修了させていただきました。

しかし伝宗伝戒の時期には北海道の厳寒期にて、座骨神経痛が毎年おきるため、出席致しかねて今日に至っております。ために教師の資格もなく代務者として檀家の僅かな寺においてささやかな生活を営みつつ法燈を立てている次第です。

これについて年令も六十六歳を迎えておりますので、せめて住職の資格位うけて生涯を終わりたいと存じるように成りました。

必ず開講期間でなければ、他に便法がありませんでしょうか。又当方の都合のよい時期

(身体に病氣のおきない) 一人にても出席して資格を受けることのできる方法等につき、相計い下さるような宗法を定めて下されば非常に幸いと存じ、筆をとりました。私の如き立場の僧侶の方も他にあるのではないかと思います。

(北海道・某寺院代務者)

答

現行の宗法では、知恩院(十二月)増上寺(二月・三月)の二カ所以外は認めず、その時期も厳冬期を選び実施しております。したがって暖たかな時期に於ける行はできぬ由、御自分の状態を各修行道場に伝え、ある程度の特例を認めていただき、行に参集なされてはいかがでしょうか。

× × ×

「浄土」講読規定

一部 定価 金六十円

(送料 六円)

会費一カ年 金七二〇円

(送料 不要)

浄土 九月号

昭和十年五月二日

第三種郵便物認可

昭和四十二年 八月二十五日 印刷

昭和四十二年 九月 一日 発行

定価 六十円

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 新光社印刷株式
会社

東京都千代田区飯田橋一ノ十二ノ六
発行所 法然上人顕仰会

電話 東京二六二一五九四四番

振替東京八二八七番



端麗な息吹きのある石仏

釈迦如来石仏龕

十輪院蔵

路傍の風雨に曝され、ときには頭部が破損した石の仏像に出会うことがよくある。田舎道ほど会う機会は多い。頭の欠けた仏像の上に、小さな丸い石を置くと、顔のない頭部が実にいろいろな表情をだしていることに気づく。なまじ顔のない石仏に近親感を抱くのは、人間の感情のままに顔のない石仏が応じて多様な表情を示してくるからである。刻みにくい石などはとくにその感が深くなってくる。こういう途方もない考えはまさに石仏への冒瀆であるのかもしれない。

奈良市街の中心地にある十輪院は明るく清潔なお寺であるが、本尊が石仏であろうとは初め予想もしていなかった。石の地藏さまを中心に観音と釈尊とが配置され、その周囲に数多くの石仏が刻まれている。向かって左にある釈迦仏は端麗なお顔とともに、石仏に見られる弱さが少ない。いったい誰がこのような石仏を鎌倉時代に発願したのであろうか。ましてや、奈良には数多くの見事な仏像があるというのに。しかし、巨大なすばらしい仏像群があったからこそ、端麗な石仏が生まれたともいえるようか。奈良のなかではなつかしい感じを抱かせる、人間の郷愁をさそう石仏と清らかなお寺ではある。

(石上善応)

大正大学教授 佐藤 密 雄 著
文 博

新 刊 講 本 大 乘 戒

B 6 判 96 P
価 150 ¥ 35

大乘諸經典に示された菩薩戒の要点を分りやすくまとめた好書

内 容

第一章 各種の菩薩戒（禁律と戒・十善業道・華嚴經の三聚淨戒・涅槃經の三聚淨戒・瑜伽・地持經の菩薩戒）

第二章 梵網經菩薩戒本の訳註（梵網經菩薩戒本の訳註梵網菩薩について・梵網經菩薩戒本の和訳と註）

発 行 所 大 道 社

大正大学教授 竹 中 信 常 著
文 博

日 本 人 と 仏 教

定 価 600 円
¥ 70

日本人の宗教観を大きく高く展開させた法然上人の教えと信仰を明示した本書は人間と念仏を復興させる巨大な灯である

教 育 新 潮 社 発 行

真 野 正 順 著

新 刊 日 本 人 の 信 仰 と 生 活

B 6 判 356 P
価 700 円 ¥ 70

昭和のはじめの国家主義の嵐のなかにあつて真の日本人の在り方を示すため、仏教的ヒューマニズムをおすすめ、また戦後の混乱期において、新しい日本人の精神生活に礎をあたえた筆者の、仏教者としての信仰と人生観のあふれる遺稿のかずかずをまとめた珠玉の随想録

内 容

第 1 章 香を焚く 第 2 章 生活を強く美しく
第 3 章 先聖行ける道 附 真野先生を偲びて

発 行 所 法 然 上 人 鑽 仰 会

東京都千代田区飯田橋 1—11—6 振替東京 82187